

山岡さ希子 不易流行

この数年、私が取り組んでいる作品は、わずかずつ、変化するものです。私自身がわずかずつ変化することもありました。わずかずつ家具を動かすことを6時間、ということもしました。今回は、目の前のものが時間とともに少しずつ変化します。それを見ているだけの私の態度も変化がないわけではありません。この世に変化しないものはない。動いていないようなものでも、絶対に変化している。私は、そのことに、今とても興味があります。「全然動かないパフォーマンスなど、つまらない!」と、怒られたこともありましたが、でも、動いていたのです。動きの速いも、遅いも、速さにおいては程度の差でしかありません。一方、それに対する身体感覚の反応は違います。しかも、経験で感覚は変わるので、反応には個人や文化差があります。案外複雑なものだと思います。舞踏に「微動」という表現方法があるようですが、私が提出したいのは、技や芸のようなものではなく、時間と体の感覚が向かい合う「体験」です。集中や集中のときれ、発見や退屈。天気の変化や日が落ちていくと場所の空気も変わります。それらすべて、その場で起きることを観客の方々と共有したいと思います。一方、「少しずつ変化するもの」として目の前に置くバターはたぶん、ただただ静かに緩んでいくでしょう。

私は、こうして何十年か生きていく間に、物や事どもが、本当に、どれもこれも、どれもこれも、確実に変化していくことが体験的にわかりました。予想よりも、何もかも、変わる。気がついたら、変わっていた、という物事がほとんどです。見渡せば花も紅葉もなかりけり。そして、全く別の花や紅葉が色づいている。私の興味や能力も変わります。記憶力が弱くなった一方、たぶん、深く考えるようになったと思います（自比）。人々の私に対する態度も変わりました。人々への私の態度も変わりました。年月の移る中、わたしという存在が一人格で本当に継続しているか、怪しくも思います。

ところで、バターという素材。普段、何気なくキッチンなどで忙しく接しているバターという素材に対しても、出会い直してみたいと思います。私たちと同じ哺乳動物の体から摂られたものだと思うと、自分の一部であってもおかしくないようにも思えてきます。もちろん、現代アートという文化の中、特にパフォーマンスアートという文脈の中で、ヨーゼフ・ボイスが「脂肪」の塊を好んで用いたことの本歌取りもしています。私たちのような生き物のエネルギーが凝縮し、発酵しています。守り、育てるための素材です。そして、その可塑的な材質は、伝統的な彫塑の材料をも、連想させます。

「不易流行」

不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず

「不易流行」とは松尾芭蕉が、俳諧について説いた言葉ですが、解釈されて、今では学問や人間形成、社会のことの摂理を説くために、応用、援用されているようです。わたしはふっと思って、この言葉を今回の作品のタイトルにしました。しかし、意味がずれているかもしれません。わたしは「流行」に対して受け身かもしれない。変わるのか、変えるのか。意識し、選んでいるのかどうか。そして、わたしは、結局のところ、どちらでも同じなのではないかと、思います。

それから「不易」についてはどう考えているか。変わらないものとはあるのでしょうか？たとえば「諸行無常」の方が私のやることの意味としては合っていたかもしれません。しかし、タイトルにするにはあまりにベタで、しかも、何か、間違っている気がします。やはり、「不易」に引っかかりたいと思い、このタイトルにしました。変わらないものもあるのだ、という希望を持ちたいのでしょうか。あるいは、不滅なものについて、考える準備をしているのかもしれません。

このことは、皆さんのお考えも、後でお聞きしたいと思っています。